

東京大学、6年ぶり7回目の戴冠

安斎秀樹

日本学生オリエンテーリング選手権リレー男子 2010年3月14日 栃木県日光市

東京大 vs. 名古屋大に東北大が追い上げる。レースの動向に会場は盛り上がる。

2010年3月14日 栃木県日光市
2009年度日本学生オリエンテーリング
選手権大会リレー競技部門男子

1	東京大学	2:15:41
2	名古屋大学	2:17:45
3	東北大学	2:27:21
4	早稲田大学	2:30:47
5	新潟大学	2:37:50
6	京都大学	2:42:11
7	東京工業大学	2:46:43
8	千葉大学	2:50:12
9	筑波大学	2:52:21
10	静岡大学	2:58:55
11	金沢大学	3:03:25
12	慶應義塾大学	3:12:41
13	茨城大学	3:22:44
14	北海道大学	3:32:40
15	東京農工大学	3:36:08
16	大阪大学	4:19:27
	一橋大学	DISQ
	岩手大学	DISQ

優勝を知らない世代

9位、3位、3位、DNQ、5位。2005年から2009年までの東京大学のインカレリレーでの成績である。インカレ創始期から学生オリエンテーリング界を牽引してきた東京大学は2004年3月に連覇を果たして以来、優勝から遠ざかっていた。その間、リレーでの最多優勝回数を東北大学に更新され、ここ2年は優勝した名古屋大学とは、大きな差を感じさせる大敗を喫していた。必勝を期して挑んだリレーで、3連覇を目論んだ名古屋大学と死闘を演じ、見事にリレーで7回目の優勝を成し遂げた。

リレーに向けて

昨シーズンは大きな転換期を迎えていた。11月に矢板で行われたインカレロングで小林遼(3年)が圧勝。そのパフォーマンスは学生の枠を超え、その後の彼の活躍を十分に予感させるものだった。その時には3位に林真一、4位に片岡裕太郎、5位に谷川友太と、4年生3人が並んだ名古屋大学の陰に隠れていたが、山上大智(3年)が8位、田中裕也(4年)が10位とチームのレベルの高さを感じさせる内容だった。

「昨年も優勝を目指したけれど、非常に厳しい目標だった」(山上)という前回とは比べ物にならないほど、優勝



東京大学のウイニングラン
(左) 2走・田中裕也 (中央) 3走・山上大智 (右) 1走・小林遼

を現実的な目標とすることができた。「田中さんを中心に、OLKとしてまとめてチームを作ってきた。併設クラス3チームも含めて選考を行い、競争は激しかった。」(小林)

一方の名古屋大学。一昨年、昨年と2

連覇を成し遂げたが、中心となった代が卒業し、4年生の3人は優勝オーダーに入っていなかった。片岡は昨年、前日のミドルで負傷したために急遽、出走を取りやめ、松井健哉(3年)が代走した経緯がある。インカレの成績だけを見ると、林と谷川が台頭してきたよ

うに見えるが、2年連続で3走を務めた崎田孝文コーチが、「下の代の存在がなければ優勝するようなチームになっていなかった」と振り返るように、その取り組みは高く評価されていた。

東大・小林が独走

前日に提出されたオーダーは、東京大学が、小林一田中一山上。名古屋大学は松井一林一片岡。ミドルでは、東京大学は小林が2位、山上が4位、B決勝に回った田中が7位相当のタイムをマークしており、名古屋大学は松井が3位、林が5位、片岡が6位となっている。2位小林から5位林までわずか33秒で、リレーで両チームが接戦を演じることは必至だった。

1走の小林は、期待通りの走りで他を圧倒する。前哨戦となった2月の関東リレーでNT選手と並走したレースの再現となった。

「落ち着いてゆっくりと入ったのですが、スタートフラッグでは先頭に立ってしまいました。2番コントロールで1分程度のミス。ここで焦ることなく落ち着いてレースを進められたのが良かったです。(同じパターンだった)岡本(将志、早稲田大学3年)と中盤まで競っていましたが、徐々に離れて行って途中からは一人旅になりました。終盤は疲労を感じていましたが、一緒に頑張ってきたOLKの大木、中野、結城、池田が併設1走の先頭争いをしているのが見えて、気持ちを切らさずにペースを上げられました。」

小林は2位の岡本に3分21秒の大差をつけ、名古屋大学の松井にも4分20秒先着する48分34秒で走破した。「1走で東大に先着されるのは予想していたが、松井なら2分程度にとどめてくれると思っていた。4分差ついた時点で厳しい(樽見典明コーチ)が、松井の52分台のタイムは決して悪いタイムではない。1走・3走のパターンでただ一人50分を切った小林が想定より速かったとしか言いようがない。東京大学の思惑通りの展開となった。

名大・林が逆転

名古屋大学が優勝するためのシナリオは2走の林で先頭に立ち、貯金をすることだった。林にとって、4分20秒のビハインドは厳しいか、と思われた直後のことだった。第一中間でその差が半分となって逆転が実現できると期待を抱かせ、第二中間ではついに林が田中に追いついたという情報が入った。田中が前半に分単位のミスをしてはい

たが、林はそれ以上のラップを刻んでいた。林は田中を引き離すために果敢に前に出るが、田中は追いつかれてからよく粘った。「同程度の走力の選手を振り切ることは難しいと感じた」という林が田中を引き連れた形でスペクターズレーンを通じた。走力が高い二人の並走は会場の緊張感を一気に高めた。「片岡のために少しでも貯金が欲しかった」林は先頭を譲ることなく走り続けたが、その差はわずか2秒だった。後半のパターンが一緒だったという不運があったが、「それを不運だと思わないのは負けた者の言い訳」

(崎田コーチ)。田中は昨年1走で出遅れ悔しい思いをしていたが、追いつかれてからも気持ちを切らさずに見事に雪辱を晴らした。



2走から3走へ。林(右)から片岡への中継の直後に田中(中央)が山上につないだ。

3走の対決

片岡は、東京大学と名古屋大学のオーダーの6人の中で唯一、前日のミドルが不本意な内容のレースだったに違いない。本来のキレがなく、一抹の不安を抱えていた。スタート直後に片岡は「後ろから山上に見られていると感じた」という。1番コントロールをほぼ同時に取って、2番コントロールに向かう時、先読みをしている間に山上の姿を見失う。もう2番にアタックしたのかと勘違いした片岡は、ルートから一度離れてしまう。自分の間違いに気がついた片岡は2度と山上をとらえることはなかった。

山上は「スタート直後は片岡さんの後ろに付こうとしましたが、おさえ気味だったのか、自分としては遅く感じて、もう少しペースを上げたくて前に出ました。終盤にもつれると何が起るか分からないので、2番3番(第一中間)が簡単だったので意識してしっかり走りました。」「3番で山上らしい姿がちらっと見えた」という片岡との差は30秒になっていた。

その後、山上はルートミスをして、「先行されているかもしれない」と不安を感じるようになる。「自分のミスで負けるのではないかと考えてしまい、つらかった。」しかし、プレッシャーを感じながらもミスを重ねないように自分をコントロールできたことが勝利へ

とつながった。第二中間の後のコントロールで、山上は脱出の時に片岡の姿を見掛けている。「片岡さんが自分のコントロールよりも遠めのコントロールにアタックして行くのが見えて、まだ自分の方が前にいることが分かって安心しました。道走りでもスペクターズレーンでも40秒くらい自分が前を走っていると思えて(実際には1分ちょっとの差があった)、これなら難しいレグでも落ち着いてこなせる、絶対に勝てると思いました。」小林は「山上がスペクターズレーンを通してからゴールするまでものすごく長い時間に感じた。」山上は最終的に片岡を2分4秒引き離した。小林は夏のクラブカップリレー、山上は関東リレーというポイントとなるリレー大会で失格となっていたため、「ゴールした時ではなく、ペナではないことがわかった時が一番うれしかった」(山上)という。

今後の目標

名古屋大学はインカレ史上初の3連覇の夢が叶うことはなかった。2年連続で1走を走った松井が残るものの、選手層の薄さは否定できない。東海高校出身の1年生近藤康満の加入はあるもののタレントが揃った代が抜けた今年度は正念場を迎えることになる。インカレリレーが行われる中津川市は名古屋大学にとって地元、王座奪還に向けた取り組みを期待したい。

東京大学はスピード感溢れる3人の持ち味を生かしたレース展開に持ち込んだことが勝因のように思われるが、3人とも部員全員の団結力がカギだったと感じている。小林は「全員の応援に力が入っていて3人だけでなくみんなで一緒に走っている感覚だった。リレーの優勝はロングのときの優勝より、喜びは断然大きかった。OLKのみんなや支えてくれた人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。」山上は「インカレの舞台にあこがれてオリエンテーリングに本気で取り組むようになったので、最高の結果を残せてうれしい。関係者や運営者の皆様にも感謝しています。」

小林と山上は4月の日本代表選考レースで活躍を見せ、ユニバシアード代表となった。それにとどまらず、小林は世界選手権の代表にも選ばれている。現役学生からの選出は1993年の入江崇(当時東北大3年)以来となる快挙である。(山上も選考対象に残ったが、辞退。)大器を予感させる二人の海外での活躍と、最終学年でのインカレでのパフォーマンスには注目である。

(安斎秀樹)